

県中教研 美術部会だより

第 33 号

発行日 平成30年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 藪 陽介
題 字 金山 泰仁 先生

「当たり前」の中の美

西部教育事務所 指導主事 濱本 良子

昨年来、何度か文部科学省教科調査官や前調査官の話聞く機会があった。その中で、特に印象に残っているのが「夕焼け」の話である。2001年の子供の意識と体験活動における調査で、小学校6年生と中学校3年生に「夕焼けを見たことがあるか」と質問したところ、53%の児童生徒が「見たことがない」と答えたという。これに対して「これは、見ているけれど、感じていないのではないか。目の前にあってもそこに意識がないから『ある』と答えられないのかもしれない」と、ある先生が言ったそうである。これを聞いて、自身の経験と重なる部分があった。

我が家の2階からは海越しの立山連峰が見え、時にはあまりの美しさに思わずシャッターを切ることもある。このように「立山連峰の美しさ」を感じるようになったのは、ここ最近のことである。他市の方から、海越しの立山連峰がどのように美しいかについて話を聞いたとき、自分がそれまで感じていなかった美しさに改めて気付かされた。幼い頃から毎日見続け、「当たり前」だった景色が、「特別」な景色になった。どんなに美しいものでも、そこに意識を向け、感じることをしなければ、美しさはないのと同じだと教えられた。

新学習指導要領では、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わることができる生徒の姿を念頭に置いて、育成を目指す資質・能力が具体的に示された。生徒の生活の中には、四季折々様々な色や形を見せてくれる花や、学校の廊下から見える山々の紅葉と青空の美しいコントラスト、通学路にある規則性をもった格子戸等、美しいものがたくさんある。当たり前すぎて見えていない美しいものに生徒の意識が向くよう、生活の中の「美しいもの」について機会を捉えて話をしていきたいものである。

3年間の美術で何ができるか

部長 藪 陽介

昨夏、故中平千尋（なかだいらちひろ）先生のお参りに長野県を訪れた。中平先生とは県外の研修会で一緒になり、それ以来連絡を取り合う間柄となった。学校を美術館にしようというキャッチコピーで2004年に「とがびアートプロジェクト」（戸倉上山田中学校）を起ち上げられた。アーティストと生徒たちによる共同制作、生徒がキッズ学芸員となり作品を解説、学校中の教室を展示室にして地域に開放など、既成概念にとらわれず精力的に美術教育を展開された。その後転任先の櫻ヶ岡中学校でも「さくらびアートプロジェクト」を展開され、2009年には私も実際に訪れ、そのスケールの大きさに圧倒された。その後、県内の研修会の講師として招聘し、その活動や美術教育にかける思いを語っていただく機会もつくった。参加された多くの先生方にも、少なからず影響を与えられたのではないかとと思っている。さらに大学院で研鑽を積んでいらっしやったが、病気により2014年48歳の若さで急逝された。

「さくらび」を訪れた際、衆議院選挙中ということもあり、それを利用し中平先生の美術にける思いを選挙ポスター風に仕立ててあった。そのキャッチコピーには以下のようなものがあつた。「思いつく人はたくさんいるが、本当にやる人はほとんどいない」「3年間の美術の時間は115時間。一日24時間とすると5日間ないんです。」「何か変化はありますか。」「面白そうだから、やってみようよ。」「115時間を短いと考えるか、長いと考えるか。私は十分な時間だと考えます。」

新学習指導要領が公示され、新しい時代に必要となる資質・能力の育成が大切になっています。3年間の美術を経てどんな生徒に成長してほしいのか、その思いをもって明日からの授業をつくっていきたいと考えます。

（南・福野中）

東 部 地 区

富山市立大泉中学校

本年度は、「美術で育てたい資質や能力を明確にして、美術の基礎的な能力の育成を目指す」を視点に研究を推進してきた。研究大会では、佐渡ありさ教諭による3年生での「自画像～未来へ今の自分を届けよう～」を題材名として、自画像を描くための構想を練る場面の授業が行われた。

本時は、今の自分自身を振り返り、将来を考えたワークシートをもとに、これから描く自画像のテーマを決め、アイデアスケッチの原案を描き上げた状態での授業であった。

始めに、2種類のアイデアスケッチをもとに、人物と背景の関係についての話し合いがあった。その後、友達のアジアスケッチをもとにどのように話し合うかの説明があった。次に、机を4人のグループにして、発表者と聞く側に分かれ、それぞれのアイデアスケッチについて話し合った。授業の後半では、座席を戻して、友だちから受けたアドバイスをもとに、自分のアイデアスケッチを見直し、よりよいものへと制作を進めていた。最後に、本時の振り返りと次時の確認をし、本時の学習を終了した。



部会協議では、例年行っているKJ法でのグループ討議を行い、その内容を代表者が発表しながら授業のよかったところや効果的であったこと、問題点等について話し合われた。

グループの発表や話し合いから、

- ・壁面の掲示や展示してある先輩の作品が、アイデアスケッチを考えるうえで非常に有効なもの

になっている。

- ・話し合いのポイントが、板書にきちんと明示され、生徒たちの話し合いがうまくいっていた。
- ・事前に、発表内容をワークシートで文章化させていたのがよかった。
- ・提示見本になったアイデアスケッチをもとに、そのよさを見つけ出そうという指導の先生の姿勢がよかった。
- ・和やかな雰囲気の中で、より積極的な話し合いや班活動がなされていた。
- ・授業のまとめとしての最後の生徒の発表が、もう1～2人あればよかった。
- ・教師の話が、もう少し端的であればよかった。という意見が出された。

研究発表では、寺崎ひろみ教諭（中・上市中）から、地元の和菓子を参考にしながら制作した2年生での「私の和菓子」、堀裕美子教諭（滑・早月中）から1年生で取り組んだ彫塑の「手」、最後に、石浦志帆教諭（魚・西部中）が、魚津、黒部、下新川の2市1郡の研究会で授業研究された3年生での「缶飲料のデザインをしよう」の発表がそれぞれあった。

そして、船木英明指導主事（東部教育事務所）先生から、

- ・新学習指導要領をもとに、美術科として学力の向上や基礎的な能力を育成するにはどのようにしていけばよいかを考えなくてはいけない。
- ・美術科として、心身の成長に合わせた題材の設定や個々の作品テーマを決定させ取捨選択しながら制作させていくことが重要である。
- ・気持ちや思いを表現することを可能とするための技法指導の工夫をしていく必要がある。という助言をいただきました。

最後に、大泉中学校の佐渡ありさ教諭のつくり上げられたすばらしい環境の美術室で授業をしていただいたことや広くて明るい会議室を有効に活用させていただいたこと、また、会場準備や部会運営に対して、富山市内の中学校の先生方に進んで協力していただいたことに感謝いたします。

辰尾 信夫（滑・滑川中）

西部地区 高岡市立南星中学校

宮本陽子教諭により、鑑賞と表現を効果的に関連させた授業が行われた。「名画にまねぶ～自分らしくリメイクしよう」という多くの名画と呼ばれるものの中から自分の好きな作品を選択し、それを自分らしくリメイクしていくという題材である。

なぜ名画なのか、どのような名画を使うのか、



自分らしくリメイクするとはどのようなことなのかということ授業案検討の

段階で話し合った。その結果、指導の方向性が明確になってきた。作品を制作するにあたって、名画に自分の気持ちや自分自身を表現するために下絵の段階で話し合い活動を取り入れたりするなど、発想・構想の段階での指導を充実させていた。本時は、リメイクした作品を飾りのある手作りの額縁に入れ、お互いの作品を鑑賞し、作品のよさや美しさをじっくりと感じ取らせる授業であった。

始めに、班の中で互いに作品を鑑賞した。生徒たちは、相手の作品を真剣に見ていた。その後自分の作品に込めた思いを説明する時間があつた。生徒たちは、自分の作品を相手に分かってもらうために一生懸命説明していた。授業の終末に生徒たちは、座席を離れて自由に作品を見て話し合う姿がみられた。最後に数人の生徒が自分の作品について全体に説明した。

部会協議では、表現と鑑賞を効果的に関連させ、ねらいに適した鑑賞の取り入れ方や、評価の仕方などについて活発に意見交換がなされた。濱本良子指導主事(西部教育事務所)先生から、本時のグ

ループ鑑賞は、皿立てに作品を立てておくという教師の配慮で鑑賞しやすい環境をつくることができていた。また、本時1時間の振り返りを設定し、その経験が、毎時間生徒の中に積みあがるのが大切であると助言をいただいた。

授業力向上のための協議では、I P U環太平洋大学の副学長・教授である村上尚徳先生による「これからの美術を考える」について講義していただき、今目指すべき美術科の在り方についてアドバイスをいただいた。

新学習指導要領では、日常から感じ取る感性を大切にし、それが美術とつながっているということを重視している。したがって、これからの教師としての「美術の捉え方」が問題になってくる。

美術とは、何を学ぶ教科なのか。第一の目標として、「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力」があげられる。それには、「①

知識・技能」
「②思考力・判断力・表現力」
「③学びに向かう力・人間性」の3本



の柱がある。直接的だけではなく、間接的に関わることがこれからの美術の役割となる。また、鑑賞活動についても同じことが言える。造形を見る視点や考える視点をたくさん持っていることは、造形を感じ取る力が豊かになり、感性の育成につながっていく。そして、描くこと、つくること、見ることを通して、造形を捉える視点を豊かにする。知識として位置付けることで生徒への定着につながっていく。

美術の授業は工夫次第で生徒たちに伝えられることはたくさんある。生徒たちが社会に出て生かせるような美術教育をこれから行っていかなければならない。

寺田 孝子 (高・牧野中)

富山県美術館「START☆みんなのミュージアム」展 (1月20日～3月4日開催)

昨年8月26日、富山県美術館がオープンした。富山県立近代美術館の時代から毎年開催されていた学校連携プログラムも新たなスタートを切った。中学校からは今年度、西部地区の3校が参加した。射水市立大門中学校は「カラフルストーリー（一人一人の物語）」と題して運動会で制作したアーチと全校生徒の自画像を中心に空間を構成した。砺波市立出町中学校は「天資養活・自他共栄 一人一人が輝く出中の塔」と題し、平面作品や立体作品を廃品となった棚を利用して展示した。氷見市立南部中学校は、「氷見ものがたり -The Story of Himi-」と題して立体作品や平面作品で学校から見える街並み、海、立山連峰等の風景を表現した。他の校種では、横浜在住のアーティスト、さとうりささんとコラボレーションした富山市立奥田小学校や、美術館で行ったワークショップを基にした富山県高等学校文化連盟の展示等、今年も見所の多い企画展であった。

この企画展、中学校はいつも「参加希望」と返答する学校は少ないが、「興味あり」と返答する学校は多いそうである。多くの先生方が「やってみたい」と思いながらも、なかなか一歩を踏み出しにくい状況なのだろう。

美術館が主催して、学校に展示のスペースを提供し、運搬や展示、予算面でもサポートをしてくれる展覧会は全国的にも珍しい。今年度参加した3校の教員は、既に過去に何度か参加した経験のある者ばかりだったが、次は、ぜひ新しい先生方にも参加してもらえればと思う。単独で難しければ、複数校合同という形もできる。中教研は、研究授業や指導案検討だけではない。本来は新しいことに挑戦し、勤務校だけではできない経験を積む場である。美術部会が、多くの先生方にとってそうした一歩を踏み出す後押しの機会になればと思う。

中澤 暢雄 (氷・南部中)

中新川郡中教研美術部会・活動報告 (5月22日：実技研修会、8月7日：現地研修会)

中新川郡中教研美術部会では、実技研修や授業づくりについての研修に取り組んでいる。また、5月の中教研部会は滑川市と合同で行っており、授業研究はもとより、授業での悩みや問題点等を相談することで、日々の指導改善につなげることができる大切な場となっている。

今年度の実技研修会では、「レイヤーの彫刻」という透明なシートを積層させ立体的に組み立てる素材体験から、生徒に身に付けさせることのできる力や指導方法等についての協議を行った。平面に描いた模様やイラストが立体として重なっていく過程を通して、見え方のおもしろさを感じ取るとともに、発想を引き出すための手立ての大切さを実感した。「イメージがもてない生徒には難しい題材ではないか」との疑問にも、「共同制作として活用することで表現の可能性が広がる」等の多様な意見交換がなされ、生徒のつくってみたいという思いを引き出し、心を揺さぶり感動につながるような題材の開発を、今後も共同で行っていきたく強く感じた。

8月の現地研修では、開館間近の富山県美術館を訪れ、開館までの準備に携わってこられた多くの方々の思いや願い、そして、これからの美術館の在り方や企画等について、木の香りが漂う真新しい館内を巡りながら話を伺った。特徴のある各展示室や開放感のある館内から眺める風景、様々な施設を利用する中で、子供も大人も関係なく感性をくすぐられるような魅力的な空間であると実感した。これまでとは違う美術館との関わり方に思いを巡らせるとともに、美術科教員として、ものを創造することの原点に触れることのできた研修となった。

3名という少ない部会ではあるが、生徒と共に学び続ける姿勢を忘れずに、よいものに触れ、感動する心を大切にしながら、今後も研修の充実を図っていきたい。

寺崎ひろみ (中・上市中)

